

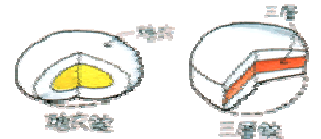


くすり箱

第2回目のテーマは、“薬のかたちとその特徴” について紹介します。

内服薬

口から飲む薬のことです。内服薬、内用薬、経口剤などとも呼ばれます。



錠剤

固形状にしたものですが、さらにこの上に糖衣をほどこしてのみやすくしたものもあります。その他、まぜ合わせると変質のおそれのあるものや薬の働きなどを考えて、何層かに重ねたもの(三層錠など)もあります。また、薬が体内の必要な部位に届いてからとけるように工夫されたものもあります。例えば、腸溶錠は、胃でとけずに、腸ではじめてとけて吸収されるように、特殊なコーティングをしています。錠剤は、むやみに噛んだり、砕いたりしないで、水やぬるま湯といっしょにそのまま服用してください。

(トローチ錠) 飲み込まずに、口の中であけて作用させる薬です。

噛んだりしないようにしましょう。

(チュアブル錠) かみ砕いて胃から吸収させる薬です。水なしで飲めます。

(口腔内崩壊錠) 口の中で速やかに溶けて水なしでも飲めます。粘膜から吸収はしないので、唾液などで飲み込みましょう。



カプセル剤

粉末や液状の薬をゼラチンのカプセルに入れたものです。カプセルの厚さなどによって、もっとも効果を上げる場所でとけるように工夫されているので、カプセルをあけて中身だけを服用すると、その効果を損なったり、思わぬ副作用をおこしたりすることがあります。

また、カプセルは、口の中や食道にくっつきやすく、その付着したところで炎症を引き起こすこともあるので、必ず十分な量の水で飲むようにして下さい。

細粒剤・散剤

いわゆる粉薬です。錠剤にくらべ、吸収が早いのが利点です。どうしてもうまく飲めない場合は、オブラートに包んだり、服薬補助ゼリーなど使用したり工夫して下さい。

顆粒剤

細粒剤の長所をいかしながら、飲みやすく、粒状に大きさを揃えたものです。飲むときは、腸に入ってから効果を十分に引き出すため、噛んでつぶしたりせずに、水と一緒に飲みましょう。

液剤

薬を甘いシロップに溶かしているシロップ剤がほとんどです。適量を量り取って飲みます。吸収がよく、乳幼児にも飲みやすいのが特長です。直接容器に口をつけて飲むと、的確な量が測れないだけでなく、不衛生ですので絶対にやめましょう。

(ドライシロップ剤) 服用するごとに水にとけて飲む薬で、甘くコーティングしてあります。

外用薬

皮膚や粘膜などに直接作用させる薬です。患部に直接作用するので効果が早く確実で、副作用が少なく、また副作用がおきても発見しやすいのが特長です。

軟膏剤・クリーム剤

皮膚や粘膜に直接塗って用いる薬です。皮膚表面の病気ばかりでなく、皮膚や粘膜から血管に吸収させて全身性の病気に効果をあげる軟膏もあります。症状や、薬の成分によって使い分けられます。

使い方は、そのまま手で塗る ガーゼに塗ってから貼るなど。塗り直すときは、ぬれたガーゼなどで前の薬の残りをふき取ってからにしてください。

もし、かゆみや発疹などの過敏症状があらわれたときは、使用をすぐにやめ、医師や薬剤師に相談をしましょう。また、フタをかたく閉めて冷暗所に保存して下さい。

エアゾル剤

外用塗布、噴霧、吸入、内服などのいろいろな目的に用いられます。素早く確実な効果を得られるのが特長です。使用するときには、火気に近づけないように注意しましょう。

点眼剤

いわゆる目薬です。液状のほか、軟膏もあります(眼軟膏)。点眼する際に容器の先が直接まぶたに触れないように注意しましょう。



容器の先がまぶたや角膜に
触れないように注意

点鼻(てんび)薬・点耳(てんじ)薬

字の通り、それぞれ鼻・耳に使う薬です。点眼剤と同じように液状タイプや、エアゾルタイプもあります。

貼付剤

皮膚に直接貼るタイプの薬のことで、湿布薬、テープ剤という形態があります。効果が長く持続され、使用方法が簡単なのが特長です。打撲や筋肉痛など局所的な用途がほとんどですが、喘息・心臓の薬・禁煙のための貼り薬などのように、薬を皮膚から血管に吸収させて、全身性の効果を期待しているものもあります。

使用する際は、皮膚を清潔に乾燥させ、できれば毛は剃ってからにしましょう。皮膚のかぶれが心配なときは、患部にガーゼをあててから薬を貼り、包帯で止めるようにしてみましょう。はりかえの時に1~2時間皮膚を休ませたりしてもよいでしょう。

坐剤

肛門や腔内に直接挿入する薬です。熱を下げたり、痛みを止めたりするのに使われる薬としてよく知られています。挿入後、中で溶けて腸の粘膜で吸収されて薬の効果を発揮します。

食事の影響を受けずに、内服薬より比較的早くに効果が現れます。吐き気があって内服薬を飲むことが難しい場合など坐薬がとても便利です。

挿入後20~30分は横になって出来るだけ安静にしてください。

この他に、腔に挿入する腔坐薬もあります。

外用薬ですので、絶対に飲んではいけません。



次回は、“薬の飲み合わせについて”のテーマで、2006年12月発行予定です。